

オノマトペを発する身体動作

日常会話における音韻構造の変異と動作の変異との同期

Simultaneous matching between the prosodic structure of onomatopoeia and the body movement of the speaker

細馬 宏通^{*1}

Hiromichi Hosoma

^{*1} 滋賀県立大学人間文化学部

School of Human Culture, University of Shiga Prefecture

1. はじめに

日常会話のオノマトペはしばしば身体動作とともに発せられることが多い[喜多 02]。また、言語学的にはオノマトペと分類されない語でも、音韻と身体動作とに同様の同期が見られることがある[Kendon 04]。本発表ではオノマトペを言語の身体性の強い表れと位置づけ、会話場面のマイクロ分析を用いながら、われわれの感覚や行為の時空間変化がどのように音韻化されるかを論じる。

2. オノマトペの音韻構造と話者の身体動作との同期例

以下では、オノマトペの音韻構造に特徴的な長音、撥音便、促音便に注目し、それに伴う身体動作との関係を記述する。用いたデータは、あらかじめ視聴したアニメーションについて大学生3人が話す課題データ(9組、約160分)、および介護施設において介護者どうしが入居者について話すデータ(約60分)である。

2.1 長音と撥音便

オノマトペと身体動作が伴う場合、動作が持続する間に音韻が長音化し、動作の終了時に促音便によって音韻が打ち切られる例(「ひゅーって」「わーって」「ざぼーって」「がぼーって」など)が多く見られた。撥音便が入ることによって音声には短い沈黙が挿入され、同期する動作はこの沈黙部分で終了する傾向があった。

2.2 長音と促音便

一方、「ごろごろーんて」「どーんと」「びょーんて」など、長音と撥音便とが結びつく例でも身体動作がしばしば見られた。しかし興味深いことに、撥音便の場合は促音便と違い、動作は撥音便の時点では終了せず、副詞化した語尾以降にまたがって動作のストロークが継続する例が多かった。このことから、撥音便は、動作をオノマトペ以降の語に継続させる機能を持つことが示唆された。また、動作の終了と撥音便とが合う場合は「どんって」のように、撥音便の直後に促音便が挿入される例が観察された。

3. オノマトペの音韻構造と相互作用

オノマトペを発するとき、話者は単に自身の身体動作とオノマトペの音韻構造とを結びつけるだけではない。会話の参与者どうしの同期の手がかりが短時間内に集まり、次に発せられる音

声への予測可能性が絞込まれると、複数の話者がオノマトペと身体動作とを協調的に操作する事例が観察される[城 11]。

事例「傘でぼーん」

(Z3はおばあさんが傘でネコをなぐる場面を述べる)

Z3: んで、おばあさんが、かさ、((Z3は腕を振り上げる))

Z2: でぼー[んて]((Z3は「ぼーん」と同時に腕を振り下ろす))

Z3: [でこれ]や

Z2, Z3は同じアニメーションを見た者どうしで、Z2はZ3の発話と腕の振り上げ動作によって次に起こる動作を予測できたと考えられる。一方、Z3は「かさ」と発話してから次の語をすぐに述べずに振り上げた腕を空中で止め、Z2に視線を向けた。これら視線、腕の動作、発話のマルチモーダルな投射の高まり[城 11]によって、Z2がオノマトペ「ぼーん」を発すると同時にZ3がそれに対応する動作を起こすという相互作用が可能になったと考えられる。

こうした相互作用現象は、オノマトペが、単に事象を表す音声であるだけでなく、われわれの相互作用を調節するための重要な表現手段であることを示唆している。オノマトペに限らず、会話の同期現象の中では音声の長音化や撥音便、促音便の音韻調節が観察される。日本語におけるこれらの音韻構造は、身体動作と言語を結びつけ、会話の参与者どうしの相互作用に深く関係していると考えられる。

参考文献

[城 11] 城綾実, 細馬宏通, 擬音語・擬態語と共起するジェスチャーの同期 -産出者の関係性とユニゾンの有無からジェスチャーの同期のはたらき-, 社会言語科学会第29回大会発表論文集, 2011.

[Kendon 04] Adam Kendon, *Gesture*, Cambridge University Press, 2004.

[喜多 02] 喜多壮太郎, *ジェスチャー -考えるからだ-,* 金子書房, 2002.

連絡先: 細馬宏通, 滋賀県立大学人間文化学部, 〒522-8533

滋賀県彦根市八坂町 2500, 0749-28-8437,

hhosoma@shc.usp.ac.jp